

脳血管リハビリテーション回復期患者の食事をする場所に対する思い

－アンケート・聞き取り調査からみえたもの－

松浦雅衣¹⁾ 山本朋恵¹⁾ 藤内益美^{1)*} 田中英美¹⁾

1) 国立病院機構鳥取医療センター3 病棟

Consideration of a convenient eating place for patients with cerebrovascular diseases who undergo a convalescent rehabilitation

- Findings from written and verbal questionnaires -

Masae Matsuura¹⁾, Tomoe Yamamoto¹⁾, Masumi Tonai^{1)*}, Hidemi Tanaka¹⁾

1) Department of Nursing, the 3rd ward, National Hospital Organization Tottori Medical Center

*Correspondence: byoutou3@tottori-iryu.hosp.go.jp

要旨

当病棟では、患者の 9 割が脳血管障害の回復期リハビリテーションを目的の入院である。リハビリテーションの結果、移動や摂食がある程度自立し、安全に行えるようになった患者は、病棟内のリハビリテーションとして、食堂で摂取することを勧めている。しかし、患者によっては、「食堂で食べたくありません」と泣いて拒まれたことがあった。このことから、患者の思いを考えず、食堂での喫食を当然のように勧めていたことに気づいた。今回、食堂で喫食している患者に対しアンケート調査、そして食堂を嫌がる患者に聞き取り調査を行い、食事場所に対する患者の思いを知ることができた。それをもとに、リハビリテーションを目的とした食堂での喫食を嫌がる患者に、看護はどう関わるか考えることが出来たので報告する。鳥取臨床科学 1(2), 311-315, 2008

Abstract

To the 3rd ward in the Tottori Medical Center, 90 percent of the inpatients are admitted for a convalescent rehabilitation of cerebrovascular disorders. To patients with better rehabilitation outcomes, having an achieved independence to some extent in their moving and eating function with safety, we usually recommend having a meal in the dining room as rehabilitation within the ward. However, some patients refused with tears and said that we did not want to eat in the dining room. Then, we realized that we had usually forced patients to eat in the dining room without careful consideration of their feelings. In the present study, we gave a written questionnaire to the patients eating in the dining room and a verbal questionnaire to those patients with refusal to eat there. According to the results from the questionnaires, we were able to understand their feelings about a comfortable eating place. And we have given some consideration to the idea of how we should engage in the nursing of patients hesitant about eating in the dining room for the purposes of a convalescent rehabilitation. *Tottori J. Clin. Res.* 1(2), 311-315, 2008

Key Words: 食事, 摂食, 食堂, 脳血管リハビリテーション, 回復期リハビリテーション; meal, eating,

はじめに

当病棟では、患者の9割が脳血管障害の回復期リハビリテーション(以下リハビリとする)を目的とする。リハビリの結果、移動や摂食がある程度自立し、安全に行えるようになった患者は、病棟内のリハビリとして食堂で喫食することを勧めている。しかし、以前、患者に食堂を勧めた際、「食堂で食べたくありません。」と泣いて拒まれたことがあった。このことから、患者の思いを考えず、食堂での喫食を当然のように勧めていたことに気づいた。

川口リは「入院生活においても、入院患者同士の食事の機会は重要であり、病室内に食事の場を設けたり、病棟に集まって食事ができるような場を設定することはとても大事な環境調整である」と述べている。リハビリにおいても、生活のリズムをつけ、社会性の維持に食堂での喫食は勧められている。川口リは「食事は、人間にとって栄養を摂取し、生命を維持することだけでなく、食べることを通して生活の楽しみや喜びを味わっている」と述べている。

今回、食堂で喫食する患者に対するアンケート調査、及び、食堂を嫌がる患者に聞き取り調査を行い、食事をする場所に対する患者の思いを知ることができた。それをもとに、リハビリを目的とした食堂での喫食を嫌がる患者に、看護はどう関わるべきなのかを考えることが出来たので報告する。

研究目的

- ・ 食堂で喫食する患者、食堂を嫌がる患者に調査を実施し、患者が食事をする場所に対する思いを明らかにする。
- ・ 食堂を嫌がる患者に必要な看護は何かを考える。

研究方法

研究期間: 2007年9月1日～10月15日

調査対象患者: 研究期間入院中の3病棟における全入院患者62名のうち調査対象者は16名であった。16名の平均在院日数は137.533日で、3病棟全体の平均在院日数は9月は68.6日、10月は100.7日であった。

調査1: 食堂で喫食する患者14名に、食堂で喫食することに関するアンケート調査を行った。

調査2: 食堂を嫌がる患者2名に聞き取り調査を行った。

以上、患者16名を対象とした。

調査内容: 結果の項に示した。

摂取場所の状況:

①食堂: 広さ70.1m². 4人用食卓テーブル4台. 患者は椅子や車椅子で食事をする. テーブルは男女別に使用している。

②部屋: ベッド, テレビ付床頭台, オーバーテーブルがそれぞれに付いている. 患者はベッドに端坐位をとりオーバーテーブルで食事をする。

倫理面の配慮: 対象者に研究目的, 調査方法を書面と口頭で説明した. 得たデータは研究以外に使用しないこと, 個人のプライバシーを保護し, 協力の有無による不利益は生じないことを説明し承諾を得た。

結果

調査1: アンケート調査結果を示す. 対象患者は男性10名, 女性4名で, 40代は1名, 50代は2名, 60代は4名, 70代は4名, 80代は3名であった。

調査項目それぞれに対し, 結果を図で示す。

①食堂と部屋で食べるのはどちらがよいか (図1) .

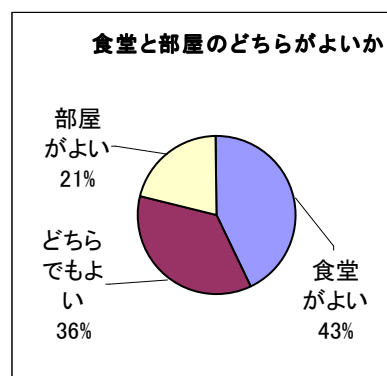


図1

②食堂で食べることをどう思うか。

自由回答とした. 無回答が1名. 回答内容は,

- ・ いいと思う。
- ・ にぎやかで良い。